

大学で、何を、どう学ぶか —2016年度入学生へのメッセージ—

4月1日の入学式を経て、「生徒」から「学生」へと脱皮した皆さんには、世の中が少し変わって見えるようになったのでしょうか。

本日から大学における学修をはじめ学生生活全般にわたるオリエンテーションが行われます。このオリエンテーションは、皆さんが高校生活から大学生活へ、しっかりソフトランディング出来るための試練です。どうか、必要なことをしっかり頭に留めてください。

本日、私からは、皆さんに「大学で、何を、どう学ぶか」という話をいたします。入学式では、二つのことをお話しました。そのひとつは、変化の時代に大事なものは、「知識の詰め込み」ではなくて「学ぶ力」を身につけることだということ、いまひとつは、「生徒」から「学生」へと早く脱皮してくださいということです。今日は、この二つのことについておさらいをした上で、私たちが用意している皆さんの学びのためのカリキュラムや学びの方法について説明します。

■変わる世界・学ぶ力

入学式でお話ししたように、今、世の中は大きく変わりつつあります。この変化の時代にあっては、教えられて覚え込んだ「知識」や「常識」は役に立たなくなるかもしれません。変化の時代・予測困難な時代に必要とされる力とは、「これまで出会ったことのない状況に遭遇した時に、そこにどんな問題が含まれているかを発見し、その問題を解決する糸口を探し出す能力」です。これを「学ぶ力・考える力」と表現しました。

皆さんに必要なのは「自ら学ぶ力」・「自ら考える力」を身につけることです。これまでの「知識詰め込み」型の学びになじめなかったという皆さんも、尻込みをする必要はありません。むしろ、新しい時代をチャンスだと考えて、新しい「学び」に挑戦してください。

ただし、人間生活科学部の二つの学科の場合、社会科学系の3学部とは違って、学び取らなくてはならない知識や技術が結構たくさんあります。

教育保育学科の皆さんには、保育士、幼稚園教員、小学校教員の免許を取得することをしっかり見据えて着実な学びを重ねていただきたい。管理栄養学科の皆さんには、管理栄養士の国家試験に全員が挑戦し、合格する決意で臨んでいただきたいと思います。

このような資格や免許を取るためには、定められた教科をしっかり身につけることが求められ、あるいは国家試験にパスするための知識をしっかり頭に入れることが求められます。ですから、皆さんの学びの形は、「教えられたことを覚えこむ」という側面が比較的大きいかもしれないのです。

しかし、そのような学びも、「受身の学び」であっては実のあるものになりませんし、将来、仕事の現場で役に立つ「学び」にはならないかもしれません。

「教えられて覚えこむ」にも、積極的な学びの姿勢、「生徒」ではなく「自ら学ぶ人」としての「学生」の学びが必要です。

社会科学系3学部の皆さんには、具体的な仕事、職種は別にしても、卒業後に「こうありたい」、「このような仕事をしたい」という強い思いを育ててほしいと思います。将来、「こうありたい」という思い・夢を、しばしば確かめながら、それをバネにして「積極的な学び」、「主体的な学び」を続けていただきたいと思います。

皆さんは、これから4年間の課程を通じて、卒業後の職業選択を中心に人生設計（キャリアデザイン）を進めていきます。大学は、皆さんをどんな人材として社会へ送り出すことができるか、あらかじめいくつかの「目指す人材像」を提示します。この「人材像」と今の皆さんとをつなぐ架け橋あるいは階段がカリキュラムです。皆さんは、大学が提示する「人材像」と「履修モデル」を参考に「自分のカリキュラム」を編成し、それに基づいて学修を進めてください。

■留学生の皆さんへ

今年も、約150名の外国人留学生を迎えることができました。

国を遠く離れて、まったく違った言葉で生活し、大学で専門の学びを進めるのは、大変な苦勞だと思います。しかし、留学生の皆さんは、引っ込み思案にならずに、何事にも積極的に取り組んでください。日本人学生とどうか積極的に交わり、日本語を磨き、日本の文化を学んでください。日本語が上達すると皆さんの世界が広がります。「国際交流室」をはじめ私たちは、留学生の皆さんの学びや生活に関わるサポートを惜しみません。日本語をしっかりと身につけて、それぞれの「夢」に向かって努力してください。

日本人学生の皆さんには、留学生に対する積極的なサポートをお願いします。「グローバル化」の時代が始まっている今日、皆さんにとって日常的に異なった文化、異なった言語に接する機会が得られるのは、大変恵まれたことです。日本の企業がどんどん海外へ進出していく時代です。皆さんにとっても海外勤務が当たり前になる時代です。そんな時代に大事なことは、異なった文化を理解する力、異なった文化を受け入れて共生できる素養です。

外国人留学生が300人を超える名古屋経済大学のキャンパスは、そんな皆さんが「グローバル人材」としての素養を養う格好の空間です。留学生の皆さんは、何かにつけて日本人学生のサポートを求めています。どうか、皆さんも引っ込み思案・人見知りを打ち捨てて、留学生と積極的に接し、共に生きる思想を育ててください。

■皆さんに必要なカリキュラムとは

さて、名古屋経済大学は、皆さんが「学ぶ力を学び取る」——そんな学びを全面的に支援します。そのために、次のように、学びのシステムや学びの方法を工夫してきました。

まず、これまで多くの日本の大学では、授業科目は教員の専門分野に即して

立てられていました。名古屋経済大学は3年前に、これを「学生本位」に改めました。「本学の学生にとって、何を、どこまで学ぶことが必要なのか」という観点で、教育カリキュラムを再編成しました。

皆さんは、これから4年間の課程を通じて、卒業後の職業選択を中心に人生設計（キャリアデザイン）を進めていきます。すでに明確な将来の目標を持っている皆さんはそれほど多くはないと思います。大学は、皆さんをどんな人材として社会へ送り出すことができるか、あらかじめいくつかの「目指す人材像」を提示します。この「人材像」と今の皆さんとをつなぐ道のりあるいは架け橋が、カリキュラムです。皆さんは、大学が提示する「人材像」と「履修モデル」を参考に「自分のカリキュラム」を編成し、それに基づいて学修を進めることになります。

■主体的な学びのための「体験型探究科目」

変化の時代に対応できる「学ぶ力」を身につけるには、「自ら学ぶ体験」が必要です。教室で教える「生徒」ではなく、「自ら学ぶ人」としての「学生」の学びが必要なのです。

この「学ぶ力」を学ぶ「主体的な学び」のきっかけを、様々な体験を通して掴んでもらおうと考え、「体験型プロジェクト」という授業科目を設けました。その多くは大学のキャンパスの内と外——広く大学を取り巻く犬山市・小牧市全域を学びの場と考えたフィールドワークです。

この大学を取り巻く犬山や小牧市には、皆さんの学びのきっかけとなる興味深い要素がたくさん存在します。昔の日本さながらの風景を残した自然があり里山が残っています。稲田に混じって桃畑があります。そして、田園を囲む山際には、新しい工業団地ができています。さらに古い歴史とそれを象徴する数々の祭があります。

みなさんは、大学のキャンパスを出てこの地域を訪ねながら、犬山の農業や工業を考える、観光を考える、祭に参加しながら歴史を考えるなど、足で歩き、社会の現場に触れながら、そこから学びの課題を見つけ出していくことができると思います。皆さんは、私たちが用意したものの中から、興味のあるプロジェクトを選択し、教員とともに「体験的な学び」に取り組みます。

この取組は、皆さんの「主体的な学び」のきっかけをつくる、いうなれば「入り口」です。この体験的学習を、皆さんはそれぞれの専門領域での「主体的な学び」につなげて欲しい、高いレベルでの「主体的な学び」につなげて、「変化の時代」に応えられる「学ぶ力」を修得することにつなげて欲しいと期待しています。

■専門領域にかかわる基礎力の習得が重要

皆さんは、入学した学部の学問領域に沿って専門的な知識やスキルを習得しながらキャリアデザインを進めます。その場合、社会が大きく変化しつつある時代に心掛けるべき学び方があります。それは、それぞれの専門領域の基礎的・原理的素養をしっかりと身につけることです。

社会科学系3学部のカリキュラム編成に当たって、私たちは、それぞれの学部にかかわる基礎的な学びを強化することを目的に、「専門共通基礎Ⅰ」、「専門共通基礎Ⅱ」という科目群を設けました。この2段階の基礎科目をしっかり履修し終えるならば、皆さんは、社会人としての基本的な知見を備えることができます。また、他の大学生にはない、社会を多角的に考える力をつけることができます。経済学部で学んでいる学生でありながら、法学の基礎的な知識・知見を身につけることができます。このような付加価値は、社会に出た後に皆さんの思わぬ力になると思います。

基礎的な学びを徹底しますが、さらに高度な専門領域を学びたいと思う皆さんには、もちろんそのための授業科目も用意されています。

■転学部に道を開く

社会科学系「専門共通基礎Ⅰ」、「専門共通基礎Ⅱ」という科目群にはもうひとつの狙いがあります。大学入学の時点で自分が将来やりたいことを「ひとつ選択する」というのは難しいことで、入学後にミスマッチに気づくケースが少なくありません。

そこで、3学部で共通の「専門共通基礎Ⅰ」の履修に加えて、隣接学部にかかわる「専門共通基礎Ⅱ」を履修することによって転学部の可能性が開かれるように設計しました。ただし、転学部には一定の要件が課せられますので留意してください。

■社会人としての基礎力を高める「共通科目」

大学の授業科目群には、「専門科目群」に加えて「共通科目群」があります。「共通科目」群は、外国語科目、情報科目といわゆる「教養科目」から構成されます。外国語力、特に国際共通語としての英語と情報（コンピュータ）のリテラシーは、21世紀を生きる社会人にとってなくてはすまない技術です。また、本学では「グローバル化」の時代を見据えて、皆さんがアジアの言語の初歩を学ぶカリキュラムも用意しました。留学生との会話が皆さんの世界を広げることにつながると思います。

また、皆さんそれぞれの専門領域とは異なった教養的知識は、社会人としての皆さんをキラリと輝かせる素養です。本学は、多様な領域の学問を今日的な課題に照らして学べるように、カリキュラムを一新しました。

さらに、皆さんが語学、情報スキル、簿記などを自由に学び、進んで検定試験などにチャレンジすることを支援します。検定合格、資格取得は皆さんにとって将来の財産となると同時に、達成感と自信の獲得につながると思います。

以上が、皆さんの現在と将来像をつなぐ学びのカリキュラムです。一度に頭に納まらないかもしれませんので、さらにガイダンスの機会を設けます。1年生ゼミの担当教員や、教務課の職員に納得がいくまで尋ねてください。

■大学の学びは「なぜ？」から始まる

最後に、大学での学びの姿勢について、一番大事なことをお話します。

皆さんは、大学における学びは皆さんのこれまでの学びとは大きく違うことに、やがて気づくと思います。高校卒業までの皆さんの学びは、大学受験合格に必要な知識を先生から教えられ、それをしっかり頭に叩き込むことが、基本的な目的であったと思います。帰宅後に自主的に勉強する場合でも、「教えられたことをしっかり頭に入れる」ことが基本的なあり方だったと推察します。

高校生全体を考えた場合、このような「知識詰め込み型」の学び方になじめない人たちが、じつは圧倒的に多いのです。

大学における学びは、これまで皆さんが教えられ、覚えこんできた知識を「疑う」ことから始まります。「疑いを持つ」ことが、「大学における学び」すなわち「学問」・「科学」の出発点です。

■社会科と社会科学、理科と自然科学の違い

「社会科」と「社会科学」の違い、「理科」と「自然科学」の違いということを考えてことがありますか。大学では、社会科ではなく社会科学を、理科ではなく自然科学あるいは理化学を学びます。社会科とは、人間社会に関する健全な「常識」を学び取る学科です。理科とは、自然現象に関する「通説」を学び取る学科だと言っていいでしょう。これに対して大学で学ぶ社会科学や自然科学は「常識や通説を疑う」ことから始まるのです。

「常識」に対して疑問を発するところから「科学」が始まるという点は、自然科学を例にとるとよくわかります。「すべての事物は神の創造物であり、不変である」と考えられ、「それは本当?」とか「なぜ?」と問うことを禁じられていた時代には、科学の発達はありませんでした。じつは、止むことを知らない好奇心と、常識に対する鋭い疑いと、注意深い観察力、そして卓抜な推理力を備えた人々の存在なしには、近代や現代の自然科学の発達はありませんでした。

数年前に、太陽系の惑星が9個から8個になったことを記憶していますか。私が生徒であったころ、惑星は「水、金、地、火、木、土、天、海、冥」と習い覚えました。惑星はこの9個でした。しかし、天文学の発展と、忍耐力にたけた観察者によって、冥王星の軌道が他の惑星の軌道と少し異なっていること、したがって、冥王星を他の8つと一緒に「太陽系の惑星」とするのは間違いであることが明らかにされました。その結果、それまでの惑星に関する通説が覆されたのです。

近年、日本人の、しかも愛知県ゆかりの人たちのノーベル賞受賞に社会が沸き立ちました。皆さんも、益川先生、小林先生、下村先生のお話を聞いたり、読んだりしたことと思います。この先生たちに共通していることは、例えば「オワンクラゲはどうして光るの?」というように、それまで知られていなかったことや、あるいは、それまで「当たり前」と考えられていた物質の秩序に関する理論に、ずっと疑問を持ち続け、探求を続けたということです。

「常識」に満足しないこと、常識を疑うこと、これが、「科学する」基本的な姿勢であり、大学における学びの基本です。

■「なぜ？」は「問題意識」から生まれる

それでは「これは本当?」とか「なぜ?」という疑問は、どこから生まれるのでしょうか。社会や自然に漫然と向き合って「常識」を無批判に受け入れる姿勢からは、「なぜ?」という疑問は生まれません。「なぜ?」という疑問が生まれるには、社会や自然の在りように対する強い関心や、これをどうにかしたいという「問題意識」が重要な働きをします。

ですから、大学における学びにとって一番大事なものは、「なぜ?」を引き出す「問題意識」を磨くことだと言ってよいと思います。そうだとすれば、これから始まる皆さんの「学びの場」は、大学の教室やキャンパスの中あるいは教科書の中にとどまることはできないはずです。

■活動空間を拓き問題意識を磨く

もちろん、大学での学びの中には、先ほど申しましたとおり、語学力とかコンピュータ処理の技術とか、社会や文化を理解するための基本的な知識など、教室で「学び取り、身に着けなければならない」知識や技術の修得が含まれます。しかし「知識や技術」を豊富に習得すると同時に、「問題意識」を磨くことが重要です。

「問題意識」を磨くには大学が用意する授業だけでは不十分です。まず、キャンパスにおける様々な課外活動に積極的に参加してください。大学祭の実行委員に名乗り出て、年に一度の大学のお祭りを学生、教員、職員の共同の力で実現するイベントを経験してください。この緑が豊かで、スポーツ施設にも恵まれたキャンパスを、目いっぱい活用してください。スポーツを通じた触れ合いが思いがけない出会いにつながるかもしれません。スポーツを律するルールが、社会全体を律する「法」の役割を考えるきっかけになるかもしれません。

キャンパスの外へ出かけて直に社会に触れてください。犬山市の伝統のある祭りや行事に参加してみてください。映画や音楽や絵画など芸術作品にも触れて下さい。

大切なのは、いろいろな種類の課外活動や社会活動と、それを通して得られる友人たちです。そして、様々な人との出会いは、皆さんの「知性」と「感性」を磨く上で大切な役割を果たしてくれると思います。

私たちは、皆さんにとって魅力ある大学をつくるために努力を惜しみません。しかし、魅力ある大学づくりは、最大多数の大学構成員であり、大学の主人公である皆さんの、学びを中心にした闊達な活動なしには実現しません。

どうか、思い切ってこれまでの殻を破って、積極的でダイナミックなキャンパスライフを見つけてください。このキャンパスに皆さんのみずみずしい知性と感性が躍動することを心から願います。